

『月次風俗図屏風』を読み解く ～田植えと田楽, そして一番の楽しみは食事～

東京大学名誉教授 黒田日出男

『^{つきなみ}月次風俗図屏風』(東京国立博物館蔵, 重要文化財)は八曲一隻。16世紀後半の作品である。花見・田植え・競馬・巻狩・雪遊びなどが描かれていて, どの場面もとても魅力的である。その第3扇・第4扇にあるのが, この田植えの場面であり, 16世紀中ごろの農村における田植えのようすがいきいきと描かれているのである。中世末期の田植えを描いた絵画作品のなかで, これ以上の絵画史料はおそらくあるまい。牛を使って代掻きをしている男が描かれているので, 牛耕を行う西日本の田植え風景であることがわかる。

田植えの主演は, 早乙女(五月女)とよばれる女たちであった。笠をかぶりはなやかな衣装をし, ^{べにだすき}紅襷をかけて田植えをしている。彼女たちの田植え労働を励まし, 元気づけているのが田楽の集団であった。聖なる樹木である松の木の下には, 烏帽子をかぶって, ^{おきな}翁の面をつけた男や黒色尉面の男が舞っており, 太鼓・小鼓や笛の男たちがはやしている。この田楽とよばれる芸能が, 早乙女たちの気持ちを鼓舞したのである。こうして水田にはどンドン苗が広がっていく。

はなやかな姿で楽しげに田植えをしているように見える早乙女たちだが, 実際には初夏の暑さで汗まみれになり, 腰も痛くなってつらくなったに相違ない。しかし, 田植えには大きな楽しみがあった。おいしい食事を腹いっぱい食べることだ。誰もが, それを楽しみに, 田植えに励んだのである。絵を見ると, 田楽の集団の足もとには, 汁や酒が入った結い桶があり, 赤い器には握り飯がうず高く盛ってある。それだけではない。右の方から, 大量の食事が次々に運ばれてきている。御椀には大盛りのご飯だ。結い桶の汁の実は何だろうか。このおいしそうなおいが田面に広がり, 早乙女の鼻を刺激したことだろう。

その食べ物の運搬方法が, 男と女で違うところがおもしろい。男は^{おうち}杓(天秤棒)で汁物の入った

桶をかついでくる。女はご飯をいっぱい入れた曲げ物の桶を頭上運搬している。また, 男と女で腰につけているものも違う。前垂れをつけているのは女たちで, 男たちは腰蓑をつけている。腰につけているものが^{ジェンダー}性差を表現しているのである。男の腰蓑は中世以来のものだが, 女の前垂れは違う。前垂れは16世紀に入るところに出現し, 赤い色の前垂れは, 『洛中洛外図屏風』によると, 16世紀半ばごろに登場した。

ところで, 男たちや子供はどうしているのかを見よう。田植えでは, 村の男たちはわき役であった。彼らは牛を使って代掻きをし, あるいは苗代から苗を運んできて, 早乙女に配る。子供たちはといえば, 右端に食事を運ぶ手伝いをしている姿が描かれている。そのすぐ下にいる子供は, 苗運びを手伝っている。中世末期の子供たちは, 大人たちの手伝いをしながら農作業を覚えた。女の子なら, 早く早乙女になってはなやかに着飾りたいと思い, 男の子なら, 一人前の大人に早くなって, 代掻きや苗配りなどをてきぱきとやれるようになりたいと思っていたことだろう。

最後に注目したいのは, 田楽のすぐ前にいる男である。赤い笠をかぶり, 腰蓑をつけている。左手に鍬を持ち, 右手に伊勢海老が描かれた団扇をかざして, 女たちを元気づけている。同じ役をしている男がもう1人いる。画面の下の方に, 同じく赤い笠をかぶっている男だ。彼ら2人は, この水田の^{たあし}田主(所有者)の役割をしているのであろう。

なお, こうした大がかりな田植えは, 「花田植」, 「大田植」, 「^{はやしだ}囃田」などとよばれており, 今でも広島県や島根県に残っている。そのうちとくに大がかりな「壬生の花田植」(広島県山県郡北広島町)は, 2011(平成23)年にユネスコの無形文化遺産に登録された。